

キリストの光のキリスト

年間第25主日 9月23日 (世界難民移住移動者の日)

(ルカ16・1—13 または 16・10—13)

神と富とに仕えることはできない。だが、富をもって神に仕えることはできる。

その方法は：富で友人をつくること。そうしておけば、富が尽きたとき、友人たちが永遠の住まいに迎え入れてくれる。

差出人が分からない手紙が着いた。東京の消印がある。手紙を読んで驚いた。聖堂の長いすを寄付してくださいと。以前、この教会におられた方だそうで、何人かに呼び掛け資金を調達されたようだが、真偽の程は分からない。ありがたいことだが、少々不安もあった。頂けるのは喜ばしいことだが、さて、どんないすが来るのか…。一カ月後の早朝、一台の大

徹底的に無欲

型トラックが教会の庭に入ってきた。しばらくして乗用車で作業員の方が着いた。その中の一人はいすのデザイナーを依頼された方。その方がこの「事件」のいきさつを簡単に話してくれた。次々と長いが聖堂に運び入れられた。誰にも知らせないのに(依頼者から搬入についても誰にも知らせないように言われていた)タイミングよく信徒会長——本人は「お茶くみ代表」と呼んでるが——と教会財務の代表が申し合わせたかのようにその場に来た。贈り主が誰であるのか「探り」をいれたが、その人を知っているデザイナーは、贈り主の人となりについては最後まで一言も明かさなかった。

「無償で寄付されると言っておられるので、贈り主の意をくんで探りはいれない方がいいですよ」とたしなめられました。

大人が七人座れる長いすが



二十脚。同じ材質で堅牢に作られた子ども用の長いすが四脚。想像をはるかにこえる立派な派ないます。二〇〇三年の聖母被昇天祭直前の出来事だった。

この「事件」をきっかけに教会共同体が変わったような気がする。時を同じくして小教区創立五十周年の準備が始まった。「神さまが喜ばれる方法で、わたしにできることを」をモットーに準備が進められた。粛々と、誰が目立つわけでもなく、先頭に立つわけでもなく、みんなが自分にできることを始めた。献金もすべて匿名にしたが、予想の何倍も集まった。その中から必要経費だけを頂き、あとは貧しい方々に金額贈った。見返りを求めないこと。人々からの称賛を求めないこと。先で救ってもらったために友人をつくらう、とさえ思わないこと。無欲になること。

そうすれば、結果として永遠の住まいに迎え入れてもらえるかもしれない。それさえも、どうでもいいこと。必要としている人がいる。わたしには与えるものがある。それを差し出す。それだけ。それだけでいい。

ひと夏の「長いす事件」は福音のこころを教えてください。贈った人の友人にしてもらえたことがうれしい。

(山元眞||福岡教区司祭/カット||高崎紀子)

今週の福音

24日・月ルカ	8・16	18
25日・火ルカ	8・19	21
26日・水ルカ	9・1	6
27日・木ルカ	9・7	9
28日・金ルカ	9・18	22
29日・土ヨハネ	1・47	51